

○豊川市域の旧村名の由来一覧

村名	地名の由来（ <u>下線は地形・土地利用や災害に関するもの</u> ）	備考
楽筒村 ガクンドウ	慶長9年(1604)の検地の際は「がくの道村」と記す。村の東を流れる豊川瀬が崖（土手）であったことから地名となったか。または鎌倉街道があった時代に、案に渡ることができる「楽渡」が「楽筒」となったか（豊川史話）。	明治11年に楽筒村と楠木村が合併し二葉村に（現二葉町）
楠木村 クス(ノ)キ	楠木と麻生田の境に楠の大木があり村名になったと伝えられる（豊川史話）。	上に同じ（現二葉町）
向河原村 ムコウガワラ	かつては賀茂村との間に豊川の渡しがあり、向河原は豊川対岸の賀茂村方面から呼ばれた地名と考えられる（豊川史話）。	現向河原町
麻生田村 アソウダ	古文書から鎌倉時代には一宮（砥鹿神社）領内「麻宇田村」と表記されたことが知られ、その昔祭裏に麻を献上した故事から村名となったと伝えられる（宝飯郡誌）。	現麻生田町
谷川村 ヤガワ	村の東側（現松原用水沿い）を豊川の分流が流れていたため「野河村」（谷川神社の慶長11年の棟札）と呼ばれ、やがて「谷川」になったか。あるいは大雨の時段丘上から野水があふれ「矢川」と呼ばれたためか。ちなみに昭和25年の改修工事で荒川が佐奈川に合流して野水被害はなくなった（豊川史話）。	現谷川町
牧野村 マキノ	鎌倉時代に豊川宿（古宿町周辺か）に公用馬が配置されたという。この馬の飼料用の草地があったことから牧野の村名となったか（豊川史話）。ここは東三河地方に勢力を拡大した牧野氏の最初の本拠地であり、豊川旧流路の分流点に牧野城が築かれ、地名を氏族の名前に採用したとされる。	現牧野町
三橋村 ミツハシ	かつて豊川は乱流し、三橋村の西側・東側を流れたり今の豊川本流を流れたりして三つの流れの中にある地ゆえに三ツ橋の地名となったか（豊川史話）。	明治17年に三ツ橋村・雨谷村・石原村が合併し三谷原村に（現三谷原町）
雨谷村 ウヤ	『三河国神名帳』にある「温谷天神」が村内の素戔鳴神社か。永禄5年の今川氏真安堵状には「宇谷」とあり、温谷（オムヤ）が後に宇谷（ウヤ）と呼ばれ「雨谷」の文字を宛てたと考えられる（豊川史話）。	上に同じ（現三谷原町）
石原村 イシハラ	地名の由来には神社勧請にまつわる説や住人の姓を村名に宛てた説など諸説があるが不詳（豊川史話）。	上に同じ（現三谷原町）
埴之上村 マモノウエ	かつて豊川の分流は埴之上村の北側から西南方に流れており、村は斜面（ママ）上の地であったため地名となったか。同村の中央部の低地に埴下と呼ぶ小字もある（豊川史話）。	明治11年に埴之上村と三渡野村が合併し三上村に、豊川市合併前は八名郡（現三上町）
三渡野村 ミトノ	和泉式部の歌に詠まれた「緑野池」が村内にあったとされ、緑野から転じて三渡野になったともいうが詳細は不詳（八名郡誌）。	上に同じ（現三上町）
当古村 トウゴ	当古の地は古代から東も西も豊川の流れを渡って出入りする郷であったので、「渡古」か「渡郷」が後世に「当古」の文字を宛てたか。近世～近代にかけ姫街道の渡船場があった（豊川史話）。	現当古町
土筒村 ドドウ	『三河国神名帳』にある「東堂大刀天神」の所在地を土筒と考え「東堂」が「土筒」になったとする説と、村の周囲が豊川の分流の跡地で急斜面の土塙（土手）となっていたので「土筒」の文字を宛てたとの説がある（豊川史話）。	かつては八名郡に属したこともある 現土筒町
犬之子村 イヌノコ	南北朝時代に南朝の某院法皇の皇子龍岳禪師が戦乱の地を避けて従者とともに入来したとの伝説から院之子とか皇の子と呼ばれていたが、高貴な尊名を憚り犬之子の文字を宛てたと伝えられる（豊川史話）。昭和8年に院之子と改称。	かつては八名郡に属す 現院之子町
馬場村 ババ	豊川宿に配置された公用馬の馬場あるいは宿役人の番場が地名の由来とも言われるが不詳（豊川史話）。	現馬場町
豊川村 トヨカワ	『和名抄』に豊川郷の名がみえる。平安時代中頃から「しかすがの渡（小坂井・平井辺り）」が豊川の水量の増加で難所となり、東西の交通は豊川の上流を迂回する新街道（俗に鎌倉街道と呼ばれた）に移り豊川（河）宿（豊川村東南部と牧野村・馬場村の接する辺り）が成立した（豊川史話）。明治初年に村内には矢作、米ノ座、中町、本町、門前、若宮、新屋の地名があったとされる（宝飯郡誌）。	現豊川町
古宿村 フルジユク	『東関紀行』の仁治3年(1242)の記録に「豊川宿は荒れ果て」とあり、13世紀中頃に東西交通は再び「しかすがの渡」に戻ったことが確認される。後世の人がかつての豊川宿の場所を古宿と呼んだか（豊川史話）。	現古宿町
北金屋村 キタカナヤ	古くは一色と称したが、やがて鍛冶の多く住む元一色を鍛冶村、鑄物師の多く住む南北の一色を南金屋村・北金屋村と呼ぶようになったという（豊川史話等）。	現金屋町
三蔵子村 サンゾウゴ	三蔵子は江戸時代には三尊郷、三尊古、三蔵古とも呼ばれた。明治以降は三蔵子としているが、「三尊」の由来は行基作の三尊の霊仏ほか諸説あり（宝飯郡誌）。	現三蔵子町
六角村 ロウカク	千両山麓に行く道の門（出入口）の地である麓門（ロクカド）に六角の文字を宛てたか、または周辺の六カ村に行くことのできる道の門から六角となったか（豊川史話）。「六角の角を有する犬頭を埋めた所」との伝説もあり（宝飯郡誌）。	現六角町

長草村 ナガクサ	長草の地名の由来は不詳だが、 <u>広い地が長い草原であったゆえに村名となったか</u> （豊川史話）。	現長草町
樽井村 タルイ	村の西側を流れる佐奈川は平時は水量が少なく、飲み水を樽に汲み溜めし上水を使ったゆえに樽井の村名となったとも言われる（豊川史話）。ちなみに佐奈川の「サナ」とは七輪の火をのせる格子形の棚のことで、水漏れ川を意味する。	現樽井町
上・下千両村 カシミモチギリ	『今昔物語』の犬頭の糸の説話にちなみ献上する白糸が千両に値するため千両としたとの説や、集落を上下に分けチギリしたので「千両」と書きチギリと称した、あるいは山林地ゆえに千木里（チギリ）と称したとの諸説あり（豊川史話）。中根洋治氏は、「千両」は「ちぎる」に通じ崩壊地名の一つとしている。	現千両町
大崎村 オオサキ	穂ノ原から本野が原と呼ばれたこの野原の内にある大きい崎の地（扇状地先端）であることから地名がついたか（豊川史話）。犬頭の糸説話の「蚕犬」の尾を埋めた地として尾崎村とし、後に大崎村となったとの伝説もあり（宝飯郡誌）。	現大崎町
本野村 ホンノ	古くは穂ノ村と称し（宝飯郡誌）、八幡村から豊川村あたりにかけて広がっていた本野が原の内にあることから本野と名付けたと考えられる（豊川史話）。	現本野町
瀬木村 セギ	古くは真木村と称し、川の瀬近くに大樹があったので瀬木と呼んだとか、井川（松原用水）に堰がありこれが地名となったとの諸説がある（豊川史話）。井川は江戸時代によく氾濫し、中根洋治氏は災害地名として瀬木は「流れをせき止めた所」としている。	現瀬木町
西島村 ニシジマ	明応東海地震（1498年）に伴う豊川の流路の変更により西島の地名が起こったと伝えられ（宝飯郡誌）、村の東側は井川、西側は段丘沿いの湧水が川となり、周囲は湿地か田地で豊川域の西の島であるため西島としたか（豊川史話）。	現西島町
柑子村 コウジ	神田地名の伝承から御菌であったとの説もある。河淵の地を香淵と書き、後世「柑子」の文字を宛てたか（豊川史話）。	現柑子町
行明村 ギョウメイ	中世には行明・柑子・正岡辺りを星野庄あるいは行明郷と称したと言い、地名の由来ともいわれる『太平記』等にみえる「星野行明」は、下郷で勢力を有した星野氏と行明氏の両者を指すと考えられている（新編豊川市史第一巻）。	現行明町
正岡村 マサオカ	集落の周辺が水田地帯で岡島と称したものが、島ではなく岡であるというので正岡の地名になったか（豊川史話）。	現正岡町
(下)長山村 シモナガヤマ	鎌倉時代の文応年中（1260～1261）に長山と称すようになったと伝えられ、上郷の丘陵地一帯が藪・樹木等の森林地帯が長く続いていた土地ゆえに長山と呼ばれたか（豊川史話）。	現下長山町（宝飯郡には長山村が2つあったため明治8年に上下に区別した）
牛久保村 ウシクボ	『和名抄』にみえる宮島郷にあたる考えられ、室町時代には周辺が一色あるいは常寒（トコサブ）と呼ばれ、明応2年（1493）に牧野古白が波多野全慶を討って一色城に入城の途中、金色清水辺りの窪地に牛が寝て道を塞いでいたのが、入城の行列を見て道を開いたため吉兆なりとして牛窪と改称、後に牛久保に改めたとされる。中根洋治氏は牛の語源を「憂し」と考え、河岸段丘沿いの崩壊地名の一つと考えており、窪（久保）は軟弱地盤地名でもある。	現牛久保町・光輝町・弥生町
鍛冶村 カジ	古くは一色村といい、後に鍛冶村と改称したとされる。『三河国神名帳』にある「加知天神」は鍛冶村の金山彦神社（中条神社）とされ、古代から中世にかけての地に鍛冶職が発展していたとされる（豊川史話等）。	明治17年に鍛冶村と南金屋村が合併して中条村に（現中条町）
南金屋村 ミナミカナヤ	室町時代における一色郷の鍛冶村と南北金屋の分村時期については諸説あるが、鋳物師の多く住む南北の一色を南金屋村、北金屋村と改称したとされる（豊川史話等）。	上に同じ（現中条町）
市田村 イチダ	伊知多神社境内には「郡（こおり）明神」が祀られ、周辺に古代の宝飯郡家（ぐうけ：郡の役所）があったともされ、郡家または郡明神に最初から米を献上した田地があるのでノ田が市田になったか（豊川史話）。	現市田町
野口村 ノグチ	穂ノ原が本野が原と呼ばれるようになり、本野が原の西部の出入り口には、早くから八幡、白鳥等の地があったので野口の地名が付いたか（豊川史話）。	現野口町
八幡村 ヤワタ	当地は八幡宮鎮座の地なるを以て八幡村と称したという（宝飯郡誌）	現八幡町
白鳥村 シロトリ	村名の由来は、奈良時代における三河国から朝廷への白鳥献上に求める説と、『三河国神名帳』にみえる白鳥大明神の所在地に求める説がある。文安年中（1444～1449）に尾張国大高城主山口次郎兵衛定次が来住した際には当村を前崎（舌状台地の形状からか）と称したと伝えられる（宝飯郡誌）。	現白鳥町
久保村 クボ	鎌倉時代に久保と称するようになったと伝えられ、久保は国府（府中）の分村であり、高貴な地名を永久に保ち伝えるように久保としたか（豊川史話）。また「窪村」と表記されたこともあり、村内西南部が音羽川沿いの低地（クボ）にあたるため、軟弱地盤地名の窪（久保）となったとも考えられる。	現久保町
平尾村 ヒラオ	平尾と稲束の地が合併して平尾村と称したという。平尾は、その地形から平地の終わりの地であることから起こった地名か（豊川史話）。	現平尾町

財賀村 ザイカ	財賀寺は鎌倉時代初期に三河七御堂に数えられた古刹であるが、村名の由来は定かではなく、萩村地内の路傍の観音石像の傍らに「右門谷村」と刻まれる道標があることから、財賀村周辺は門谷村と称した時期もあったとされる（宝飯郡誌）。	現財賀町
御油村 ゴユ	地名の由来は、古記に「本村椿屋敷より油を禁中に奉る」とあり、かつて油を製造する者がいて御所にたびたび献納したことからという（宝飯郡誌）。	現御油町
国府村 コウ	字的場に豊成公跡があり、霊亀養老年間頃に藤原豊成という公卿が在住した跡といわれ、国家鎮護のために守公神社を勧請したという（宝飯郡誌）。守公神社の応永23年（1416）の古鐘には「宝飯郡府中守公神」とあり、室町時代には府中と呼ばれ、白鳥・八幡にかけての一角が古代～中世の国府・国衙や守護所であったことから村名となったと考えられる。	現国府町
森村 モリ	村内に望理神社があり『和名抄』にみえる望理郷が森村の故地とされる。望理は安閑天皇の名代勾部との関係でマガリと読み⇒マウリ⇒モリと転じたとの説もある（豊川史話）。	現森一丁目～五丁目
小田淵村 オダフチ	『三河国神名帳』の小田天神が淡州（アワシマ）神社に比定でき、音羽川の旧流路とされる安藤川の川縁に小田天神があったため村名となったか（豊川史話）。小田淵村の出郷に桜町あり。	現小田淵町
為当村 タメトウ	村内稲荷神社の永禄12年（1569）の棟札には「渡津庄多米当村」とあり、為当から小田淵辺りは条里制水田の広がる穀倉地帯であったことから「多米当」と名付けられたか（豊川史話）。	現為当町
江村 エ	当初「江尻村」と称し慶長の頃「江村」に改めたとされる。豊田珍比古『三河百話』では「江人」が居住していたため村名となったとする。	明治11年に鵜飼島村と合併して江島村に（現江島町）
鵜飼島村 ウカイシマ	かつて豊川の鵜を用いて鵜飼が行われたため村名となったが、大洪水で豊川の川筋が変わり鵜がいなくなったとの言い伝えあり（宝飯郡誌）。豊田珍比古は『三河百話』で鵜飼部との関わりを指摘する。	上に同じ（現江島町）
御園村 ミノ	『神風抄』（伊勢神宮の領地を記した中世の記録）に載る泉御園の故地とされるが定かではない（平凡社日本歴史地名大系）。	明治11年に八名郡御園村と養父村が合併して金沢村に（現金沢町）
養父村 ヤフ	『和名抄』にみえる古代の養父郷に比定される。地名の由来については、養父を藪の意に解して自然の様子から付けたとも、養父族（本国但馬丹波族日下部氏流）が古住したからとも言うが詳細は不詳（一宮町誌）。	上に同じ（現金沢町）
東上村 トウジョウ	往古は東城村と表記したこともあると言う（宝飯郡誌）。地名の由来は不詳。	現東上町
北岡新田 キタオカ	寛永7年（1630）に松原村の庄屋勘太郎が分村して開発した村であり、松原村から見て北側の岡の上に位置することから名づけられたと考えられる。	明治9年東上村へ合併 現東上町
（上）長山村 カミナガヤマ	三河守藤原長山が三河国在任中に長山荘を開墾しそのまま土着し長山という地名がついたと言うが不詳（角川日本地名大辞典）。	現上長山町（宝飯郡には長山村が2つあったため明治8年に上下に区別した）
松原村 マツバラ	松原の名称の由来は不詳。ちなみに松原用水は当初橋尾村の豊川に堰を作り取水し、後に堰の位置が草加部村、そして松原村へと上流域に移動し松原用水と呼ばれるようになった。	現松原町
草加部村 クサカベ	日下部村と記すこともあった。雄略天皇の皇后草香幡皇女（仁徳天皇の子）のために設けられた名代クサカベを地名にしたとの説がある（角川日本地名大辞典）。	かつては八名郡に属す 現豊津町
中島村 ナカジマ	豊川の大洪水による地形の変化が地名になったと考えられている（角川日本地名大辞典）。	上に同じ（現豊津町）
井之島村 イノシマ	豊川沿いの低地に立地するが、村名の由来は不詳。	上に同じ（現豊津町）
橋尾村 ハシオ	地名の由来は、北方を通る鎌倉道に橋が架かっていたことからはじめ橋尻と称し、後に橋尾に改称したと伝える（角川日本地名大辞典）。	かつては八名郡に属す 現橋尾町
一之宮村 イチノミヤ	一之宮の地名の由来は地内に鎮座する砥鹿神社が三河国一宮であったことによる（一宮町誌）。	現一宮町
大木村 オオキ	大木の名称の由来は不詳。	現大木町
足山田村 アシヤマダ	地名の由来は、かつては葦が山の田によく繁茂していたことから転じて足山田になったと言われているが不詳（角川日本地名大辞典）。中根洋治氏は足山田村の「足」を「悪し」地形に通ずるとして災害地名の一つとしている。	現足山田町
西原村 ニシハラ	大木村の新城街道沿いの集落から見て西側の原野のため西原と称したか。	現西原町
篠田村 シノダ	地名の由来は、かつては水田の端にシノ（小さな笹）が良く繁茂していたからともいわれるが不詳（一宮町誌）。	現篠田町
赤坂宿(村) アカサカ	『和名抄』にみえる「宮道」や伊場木簡の「宮地の駅」を赤坂に比定する考えがある。赤坂の名称は地面が赤土で坂があるためと言われるが不詳（音羽町誌）。	現赤坂町
萩村 ハギ	萩の名称の由来は不詳。山地を抱え、土砂災害の危険箇所も多く、「土が剥がれやすい所」として「はぎ」とした崩壊地名の可能性もある。	現萩町

長沢村 ナガサワ	長沢村は昔乙葉村と呼ばれたが後に長沢村と改められたという。現在の下谷下川は昔乙葉川と呼ばれたことが古図で確認でき、現在も「音羽」の小字名が残る。長沢の由来は長い沢があるためと言われるが不詳（音羽町誌）。	現長沢町
上佐脇村 カミサワキ	かつて海が近くに迫っていた頃、波風が騒ぐことから「さわき」になったとされる（角川日本地名大辞典）。	現御津町上佐脇
下佐脇村 シモサワキ	上佐脇に対し下佐脇と称した。また文政元年（1818）には沿岸部に下佐脇新田が開発された（宝飯郡誌）。	現御津町下佐脇
御馬村 オンマ	御馬とは朝廷などの牧場である御牧の馬をさし、それから出た地名と考えられるが不詳。また以前は引馬または引馬郷と言ったとされる（角川日本地名大辞典）。	現御津町御馬
西方村 ニシガタ	地名の由来は、干潟の存在から西潟と称し、それが西方になったという（宝飯郡誌）。	現御津町西方
坪野村 ナギノ	坪野の由来は、昔飯盛長者が愛児を失い日夜泣き悲しんでいたところ行脚中の行基によって救われ一寺を建立し、泣野（鳴野）が転訛したものという。また「万葉集」の安礼の嶺の歌に対しこちらは地勢上波静かなため「なぎの」といったとも言う（角川日本地名大辞典）。	現御津町坪野
大草村 オオクサ	大草村の村名の由来は不詳。中根洋治氏は大草は低湿地を表し、稲が腐りやすい所として幸田町大草や田原市大草等を挙げている。	現御津町大草
赤根村 アカネ	地名の由来は、かつてあかね草が繁茂していたことから転じて赤根になったと言う（角川日本地名大辞典）。	現御津町赤根
広石村 ヒロイシ	旧宝飯郡御津町域は『和名抄』の御津郷に比定され、広石村内には式内社である御津神社があり、かつては周辺の村々を含め「御津ノ庄」と呼んでいた時代もある。広石の由来は広磯の転訛で、昔海がこの辺りまでできていたとされ「船津」などの小字名が残る（角川日本地名大辞典）。	現御津町広石
茂松村 シゲマツ	地名の由来は、東方山頂の茂松城跡の城内に老松が2本あり互いに茂り合うため茂松、あるいは2本が重なり合うので重松と言うようになったと伝える（宝飯郡誌）。	明治11年に茂松村と森下村が合併して豊沢村に（現御津町豊沢）
森下村 モリシタ	南北朝の頃、波多野行近という人が秦野（神奈川県）から三河に移り森下に住んだので森下氏とも言った。波多野一族は森下を拠点に御津庄の荘官になったと伝えられる（宝飯郡誌）。	上に同じ（現御津町豊沢）
灰野村 ハイノ	地名の由来は草壁皇子の菩提を弔うため建立された宮路寺が兵火に焼かれたことから名づけられたとの伝承がある。鎌倉時代初頭の『吾妻鏡』に出てくる羽渭（はいの）庄に比定される（角川日本地名大辞典）。	明治11年に灰野村と金割村が合併し金野村に（現御津町金野）
金割村 カナワリ	弁慶が国分寺の鐘を持ってきたところ、鐘が国分寺が恋しいと鳴るので、怒って叩き割ったため、中山邑の村名が鐘破（かなわり）村になったとの言い伝えがあり、慶長検地帳にも鐘破の文字がみえる（宝飯郡誌）。	上に同じ（現御津町金野）
小坂井村 コザカイ	『和名抄』にみえる度津郷に比定され、小坂井の地名は段丘に沿って小さな坂道と地下水の湧き出る泉の多いことに由来するという（小坂井町誌）。	現小坂井町
篠東村 シノヅカ	『和名抄』にみえる篠東郷に比定され、篠東の地名は、篠竹の繁茂する塚（古墳）があったこと、また篠竹を刈り束ねて矢を作ったことから名づけられたという（宝飯郡誌）。	現篠東町
宿村 シュク	地名の由来は、『和名抄』にみえる度津郷の一部で宿場があったからという（宝飯郡誌）。	現宿町
平井村 ヒライ	平は平地、井は泉を意味し、小坂井台地末端の泉の湧く地として平井の名がおこったとされる。小坂井や平井の泉は長い間共同の洗い場として利用されてきた（小坂井町誌）。	現平井町
伊奈村 イナ	若宮八幡社の縁起によれば室町時代に本多某という者が信濃国伊那郡より移住してこの地を拓いたので村名を伊奈としたとある他、人家と田が増えるに従って稲叢（いなむら）が並び村名になったとも言う（宝飯郡誌）。	現伊奈町

※（ ）内は主な参考文献で、（豊川史話）は『豊川史話』第9号、（宝飯郡誌）は『三河国宝飯郡誌』の略。